

F12

キラキラネームというカテゴリー

2年3組 小山 真白

要 旨

「親はどうしてキラキラネームをつけるのか？」という疑問を解決するための研究から始まり、個性的な名前と読みにくい名前の違いやキラキラネームという言葉の使われ方を調査した。様々な視点からキラキラネームについて研究を進めていく中で、「キラキラネームという言葉は存在するが、そのカテゴリーに分類される名前は無いのではないか」という結論に至った。

1 目的

- I 親がキラキラネームを名付ける原因を明らかにする。
- II 「個性的な名前」と「難読の名前」の違いを明らかにする。
- III 名前の変化の仕方に特徴があるのかを考える。
- IV 「キラキラネーム」という言葉が広がることによって人々の名前に対する認識がどう変わったのかを明らかにする。

2 方法

I に対して

『名づけの世相史 「個性的な名前」をフィールドワーク』を読み、キラキラネームを名付ける理由を考える。

II に対して

『たまひよ 赤ちゃんのしあわせ名前事典 2020～2021 年版』から、個性的または難読であると感じた名前をそれぞれピックアップし、違いを見つける。

III に対して

名前ランキング内の名前に使われる漢字の読み方の変遷を明らかにする。

IV に対して

人々がキラキラネームに対してどのようなイメージを持っているのかを子どもの名づけ調査をもとに考察する。

3 結果・考察

I の結果

- ・現代の親たちが「珍しい名前」を付ける動機は、「個性」という一語に要約できるでしょう。(小林, 2009)
- ・これまでに見たことのない「珍しい名前」が急増し、「読めない名前」が溢れつつあるということでしょう。(小林, 2009)
- ・「個性的な名前」ブームにおける「個性」とは、その属性において求められるものではなく、他者との差異に基準を置いたものであるということです。(小林, 2009)

I の考察

「個性」が求められる社会を背景にして名前にも個性が求められるようになったと言える。た

だ、その個性的な名前には、それまで名前としては用いられず、聞き慣れない「珍しい名前」と、音としては聞き慣れていても、通常の読み方とは異なる「読みにくい名前」があると考え、*目的II*を設定した。また、他者との差異化をはかるために、どのように名前を変化させていったのか考える必要があると判断し、*目的III*を設定した。

II の結果

たまひよ 赤ちゃんのしあわせ名前事典 2020～2021 年版から抜粋

キラキラネームだと考えたもの いちご (莓)

りずむ (璃澄)

読めない名前だと考えたもの 麗 (うらら)

元緋 (あさひ) 等

II の考察

区別は主観的でしかないため、違いを明らかにするのは困難であると結論づけた。名前単体に注目するよりも、時代における名前の変遷や人々の名前に対する認識に重点を置く方が、名前の多様化や個性化をより理解できるのではないかと考えた。

III の結果

「明治安田生命名前ランキング」より

例1 1999 年 大輔 (だいすけ)

2005 年 大翔 (ひろと)

2005 年 大輝 (だいき)

例2 1978 年 陽子 (ようこ)

2019 年 陽菜 (ひな)、陽翔 (はると)

この「大」という漢字は、「だい」という読み方だけでなく、「ひろ」という読み方も主流になっている。同じく「陽」も、「よう」「ひ」「はる」という読み方が広がっている。

III の考察

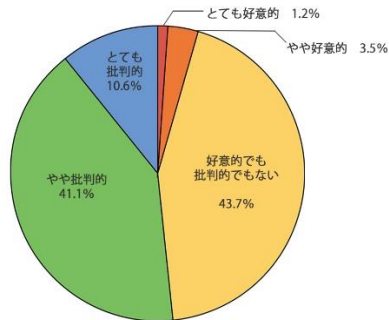
このことから、名前における漢字の読み方を変えることで、差異化をはかってきたといえるのではないか。こうした差異化が他の漢字でも行われていて、名前の多様化が進んでいったのだろう。そういう意味で、「キラキラネーム」と「そうでない名前」(以後 一般的な名前 と表記)はさほど

変わらないのではないかと考えた。目的Ⅳを設定した。

Ⅳの結果

「ミキハウス 名づけ調査」より

【「キラキラネーム」についてどのように思いますか？（単回答）】



<回答者数：5086人>

調査の対象は、「ミキハウスベビークラブ」会員のうち、子どもを持つ親である。名付けをする側である親の51.7%が「キラキラネーム」に対して批判的であるとわかる。

Ⅳの考察

キラキラネームをつけようと思って名付ける親は少ないのではないかと考えた。結果的にキラキラネームと呼ばれている可能性が高いのではないかと考えた。「キラキラネーム」というのは第三者から見た評価であり、その評価は主観に基づいたものであると考えた。

「キラキラネーム」という言葉を認識したことで、名前を自分の感覚だけでカテゴリー分けするようになり、その結果「キラキラネーム」という言葉に対して人々が、それぞれに違ったイメージを持つようになったと考えた。

全体の考察

ⅠとⅢの結果から、名前の多様化は必然的なことであると考えられる。多様化が急速に進んだ結果、これまでになかった個性的な名前が多く登場した。そうして生まれた名前を、第三者がひとくくりにしたものが「キラキラネーム」であり、当事者にとってはくくりにすることに何か重要な意味がある訳ではない。キラキラネームといわれる名前の誕生は、そうでない名前の延長である。「キラキラネーム」という名前の新しいカテゴリーを認識した人々は、それと同時に「一般的な名前」というカテゴリーも認識しており、自身の名前、他者の名前がキラキラネームであるのかないのかを無意識的に判別するようになった。言い換えると、名前を自分の感覚だけで評価するようになったのである。

4 結論

キラキラネームという言葉は存在するが、そのカテゴリーに分類される名前は無い。あくまでキラキラネームは第三者が評価するものであり、その基準は世代や個人の感覚によって異なる。

5 参考文献

- ◆小林康正（2009）『名づけの世相史「個性的な名前」をフィールドワーク』（風響社）
- ◆『たまひよ 赤ちゃんのしあわせ名前事典 2020～2021 年版』（2020 ベネッセコーポレーション）
- ◆「明治安田生命 名前ランキング」
<https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/index.html>（2021/2/15 アクセス）
- ◆【令和元年！＜子どもの名づけ調査＞発表】
「ミキハウス出産準備サイト」にてママ・パパ 4117 名の名づけ調査を名前研究者が徹底分析
<https://prt-times.jp/main/html/rd/p/000000008.00027487.html>（2021/2/15 アクセス）